



「アザース」"THE OTHERS" ●●●第12回

“So, I imagined it, didn't I?” 「空耳だったのね」

出てくるのは原始的でシンプルな怖さの要素だけ。流血場面も化け物もない。けれども、いや、だからこそ、第1級の恐怖を観客の想像力の中にもたらす。そんな「アザース」のセリフの味わい深い怖さをご堪能あれ。

文=中野香織



アメリカで8週連続ベスト5を記録するなど世界中でブレイクした「アザース」は、ギャガ・コミュニケーションズ、ギャガ・ヒューマックスの共同配給で4月からロードショー。

ほんとに怖いものってどんなものでしょう？

CGを駆使したおどろおどろしい化け物や、血まみれの惨殺死体を見せられても、21世紀の観客にはもはや笑劇にしか見えません。怖さに抵抗力がないコドモですら笑って見ていたりします。

どぎつい映像慣れた現代のコドモでも怖がるものといえば、暗やみ、ドアの後ろ、カーテンの陰、そして出所がわからない声や物音……。大人になって若干抵抗力がついてきても、暗やみで聞こえる正体不明の物音にはやはり心臓が縮み上がります。固まったまましばらく待つても何も聞こえなければ、「空耳だった」と言い聞かせるわけですが。

怖がる自分を安心させようとするこんな時のセリフを英語でいえば、こうなります。

So, I imagined it, didn't I?

(空耳だったのね)

ニコール・キッドマンも映画のなかで口にするこのセリフのなかにこそ「ほんとに怖いもの」の正体を示すヒントがあります。'imagine'です。シェイクスピアが『マクベス』のなかですばり、こんなセリフを書いています。

Present fears are less than horrible imaginings.

(眼前の恐怖も想像力の生み出す恐怖ほど恐ろしくない)

というわけで「アザース」。

コドモも怖がる原始的でシンプルな怖さの要素だけをエレガントに使いこなし、ゆったりとしたペースでじわじわと不穏な緊張感を高め、そうしながら観客にありとあらゆる怖い事件を想像させ、最後はぐるっと世界のねじを回転するような技を見せてくれる、怖いのが嫌いな人にこそお勧めし

たいゴシック・ホラーです(ねじを回転、といえどこの映画はヘンリー・ジェイムズの『ねじの回転』を映画化した、ジャック・クレイトン監督の『回転』も思い出させます)。

流血場面も化け物も見せず、余分なものをぎりぎりそぎ落として、観客を想像力の生み出す恐怖との向き合わせるように導く監督のアレハンドロ・アメナーバルの才能には、製作をかってでたトム・クルーズでなくても一目ぼれます。

さて、舞台は1945年のイギリス、チャネル諸島ジャージー島の大きなお屋敷。濃い霧に包まれ、電気も止められたままのこの屋敷に、戦争に行っただけ帰ってこない夫を待つグレース(グレース・ケリーを思わせるキッドマン)が、光アレルギーの二人の子供とともに暮らしています。子供たちは日光に当たることが命とりになるため、日中も分厚いカーテンが閉められたままであるばかりか、50ほどあるドアはすべて出入りの度に鍵をかけられなければなりません。こんな暗やみのなかで神経質に暮らすグレースの心境とはいえば、

I'm beginning to feel totally cut off from the world.

(世間からすっかり切り離されたような気がしはじめてるの)

このセリフが期せずして後の展開の伏線となるわけですが、それはともかく、グレースはこのお屋敷に三人の使用人を雇い入れます。「かつてここで働いていたことがある」という彼らが来てから、家の中で奇妙な現象が起こり始めます。他人の足音や話し声や泣き声が聞こえ、ピアノがひとりでに鳴りだし、ドアが勝手に開閉する……。当初こそ'I imagined it'と否定していたグレースですが、ついにこのように認めざるをえなくなる瞬間がきます。

There is something in this house, something diabolic. Something which is not, not at rest.

(この家には何か魔物のようなものがある。眠らない何か)

それって何? 三人の使用人の正体は? ひどりはなぜ口が聞けない? 子供が見た少年や老婆って誰? グレースが子供に口止めする「あの日のできごと」とは? 庭師は庭でいったい何をしているのか? なぜ霧が晴れないのか? こうした疑問に対するすべての答えを知っているらしい家政婦ミス・ミルズ(ヒッチコックの『レベッカ』の家政婦を彷彿させるフィオヌラ・フラナガン)は、

All in good time. (時が来ればね)

などと悠長に構えていますが、ますます深まる謎のなかに沈められる観客はそれどころではない。怪異なエピソードがひとつ積み重なるごとに、ありとあらゆる想像が頭を駆けめぐります。あー、これが怖いってことなのか、と頭の片隅で意識させられながら。

すべてを明らかにすべく帰ってきた家政婦が言うセリフが、深みもちます。

We must all learn to live together.

(わたしたちは共に生きることを学ばねばなりません)

正体を知らないときに'diabolic'な'The intruders'(侵入者)だと思っていた'The others'(他の奴ら)は、見えてみれば共に生きることを学ぶべき存在だった。「敵」と闘うことが正義と勘違いされるような時代にあっては、いっそう拡大解釈したくなるセリフです。映画館を出るころにはジョン・レノンの'Imagine'すら口ずさんでいるあなたがいるかもしれません。